

北の山の光と影

日高山脈の春

私の山岳ガイド業の原点

北海道で生まれ育った私は、山好きの家族の影響で小学校入学前から大雪山の山々などを連れ歩かれた。山は私にとって大事な遊び場となつていく。その後、大学生となり本格的に登山のめり込んでいく。なかでも原始が色濃く残る日高山脈での登山は強烈な印象であった。川の流れをさかのぼり、道なき道から、訪れる人さえ稀な山頂に立ち、一切の人工物が視界の中にない、延々と連なる山並みをまのあたりにして、言いしれぬ孤独と解放感を味わった。この感動を誰かに伝えたい。私の愛する人たちにこの体験を味わってもらいたい。これこそがこの北海道において山岳ガイド業を営んでいくことと考えた私の原点であった。

短い北海道の夏山登山シーズン

雪の多い北海道の、標高が1500mを超える山では、実に1年の3分の2にあたる10月から5月までは雪に閉ざされる。山懐は深く、夏には使える林道も自然融雪により開通するまでは登山口に近づくことさえできない。また、登山者の少ない時期の登山にはヒグマへの警戒感もある。このような厳しい自然条件もあり、登山者が集中するのは、山々が短い夏を迎える6月末頃から8月中旬に限られてくる。

夏山登山シーズンが長く、登山者の多い本州の山々とは異なり、このような短い登山期間では営業小屋も成り立ちしはない。したがって、北海道の山小屋はそのほとんどが無人の避難小屋的な存在となり、それら施設を利用するにあたっては、全ての食料や寝具を持参しなければならない。北海道における登山スタイルではそ

れがあたり前であり、テントを持参することさえしばしばだ。また山の中で起こりうるさまざまな問題も、携帯電話さえ圏外となるこれら山域では、個人またはパーティーで解決しなければならず、上級向の山ということになる。ひとこと言えば「北海道の山をやるのは大変だ」に尽きる。

相次いだ遭難事故

最近、北海道の夏山においては、このような事情を理解していない本州方面からの登山者による事故が多い。短い日程の中で悪天候についての強行登山による事故・遭難がほとんどである。高い航空運賃を払い、休みをとつての北海道登山はさながらミニ海外遠征なのであり、せっかくなのだから、多少の無理はしても登っていきたくらいという事情はわからなくもない。しかし、自然というものは本来人間の手に負えないものであり、人間の側の事情を山に押しつけてよつとするとところに無理があるのだ。

このような事故は、本州方面から北海道にやってくる旅行会社主催の登山ツアーや登山ガイド同行の登山にも見られる。99年9月の羊蹄山ツアーでの客2名の置きざり凍死事故、2002年6月の十勝岳山頂付近での雨具を忘れた参加者の凍死、2003年8月の台風接近中のトムラウシでの凍死と、数件の死亡事故が連続している。登山ツアーの参加者はリーダーへの信頼と安全を確信しているにもかかわらずだ。北海道の山は、そういった未熟なガイドや観光ツアーの延長のような添乗員リーダーには手に負えない、やっかいな自然なのだ。

今、ガイドに求められるのは、知識や技術は



日高山脈にて



芦別岳 春

当然のことながら、豊富な経験から導きだされる安全と危険の分岐点を見きわめる判断力と実行力ではなからうか。何がなんでも客の安全を図ってこそガイドであり、安易なガイドは排除されるべきであろう。

利用調整の必要な自然との付き合い方

一次産業、二次産業が衰退しつつある中、北海道を支える基幹産業となりつつあるのは観光である。それも、これまでの観光地めぐりから、スキーや登山、ラフティングやホーストレッキングなどの体験型観光の人氣が高い。

レベルの高い自然、豊富な高山植物や良質のパウダースノー、野生動物や流水などまさに自然は一流である。北海道の観光をやゆして、「素材は一流、施設は二流、サービスは三流」という言葉がある。なるほど当ではまるる言葉である。ただサービスに関しては、北海道全体が今、取り組もつとしているところである。地元のガイドが知りつくした北海道の自然を案内する。安全を図り、北海道のすばらしさと厳しさを知ってもらうことで、リピートする北海道ファンを作ることが重要だ。

航空会社や大手旅行会社が行つよつな大量の観光客を一気に受け入れるアウトドア型体験観光は、施設が十分に整っていない今の北海道には適しているとは思えない。

登山の事情から言えば、山の上の宿泊施設やキャンプ地は小さく、トイレさえ未設置のところが多い。そんな所に多くの登山者が集中して訪れれば自然環境がまたたくまに破壊されていくのは自明の理である。北海道に残された貴重な自然を残すためには、利用調整を図つても

優先するべき課題であり、利益重視によって使いつぶさないようにしていかなければならないだろう。

アウトドア資格制度

2002年から始まった、北海道庁が主導する北海道アウトドア資格制度は、まさにそんな中でできあがった北海道アウトドア型体験観光の規範である。これは登山を始めとして北海道を代表する（人氣のある）アウトドアスポーツのガイドに対して試験を行い、資格を認定していくこととする制度である。認定に関しては、自然や安全に関する知識・技術はもちろんのこと、ガイド一人あたりの客対応人数や自然環境との調和と保全への取り組みも図られる。こうして認定を受けたガイドたちが、北海道の山にやってくる登山者の安全と自然保護の啓蒙を図るよう努めていけば、未来は明るい。しかし、これから資格制度は、許可・免許制度のようなものではなく、目標設定にすぎない。道外から流入してくる大量ツアーや未熟なガイド登山に関しては相変わらず規制はない。

今後は、こつしたガイドや施設を利用しようとする登山者の側の意識の問題となってくるだろう。

最良のサービス

質の高いサービスや確実な安全性というのは、食事にたとえるなら、ただ空腹を満たすためにファーストフードを口の中に放り込むのではなく、ゆつたりとした環境の中でおいしいものを食べることに似ている。

訪れる登山者や観光客が、北海道をただの通

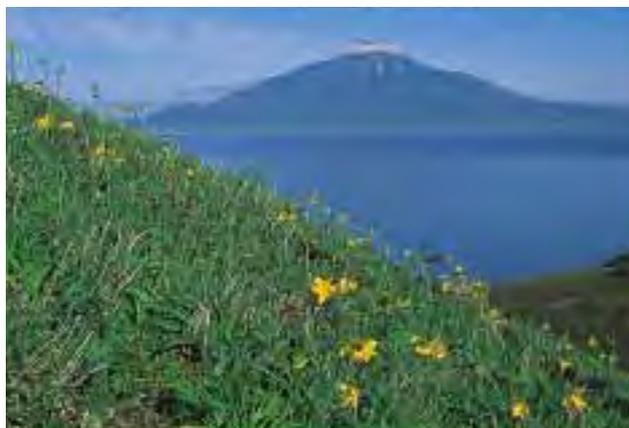
過点とせず、何度訪れても良い所と感してもらえようとするのが最良のサービスであり、まさに、北海道を愛する北海道人によるかわりである。いつまでも、北海道の豊かな自然が今のままでありつづけることをのぞみたい。

株式会社ノマド

専務取締役
宮下 岳夫



知床ラウス岳をあとに



礼文からの利尻